

論文 / 著書情報
Article / Book Information

| | |
|-------------------|---|
| 論題(和文) | 留学生のコミュニケーションメディア観及びそれに影響を及ぼす諸要因 |
| Title(English) | International Students' Perception of the Three Communication Media of Cell Phone Calls, Cell Phone Text Messages and E-mail via PC, and Factors Influencing on It. |
| 著者(和文) | 叶少瑜 |
| Authors(English) | Shaoyu Ye |
| 出典(和文) | 日本教育工学会論文誌, Vol. 36, No. 1, pp. 59-68 |
| Citation(English) | Japan Journal of Educational Technology, Vol. 36, No. 1, pp. 59-68 |
| 発行日 / Pub. date | 2012, 7 |
| 権利情報 / Copyright | 本著作物の著作権は日本教育工学会に帰属します。 Copyright (c) 2012 Japan Society for Educational Technology. |
| rights | 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである |
| relation | isVersionOf: http://ci.nii.ac.jp/naid/110009479511 |

留学生のコミュニケーション・メディア観 及びそれに影響を及ぼす諸要因[†]

叶 少瑜^{*1}

東京工業大学^{*1}

本研究では、留学生の携帯電話・携帯メール・PC メールといったコミュニケーション・メディアに対する認識の相違を明らかにするとともに、それに影響を及ぼす諸要因についても検討を行った。埼玉大学に在籍する518名の留学生を対象に質問紙調査を行ったところ、(1)情報伝達と友情増進、対人緊張において、コミュニケーション・メディアによる認識の差があった；(2)コミュニケーション・メディア観は、情報伝達においては経済状況（国費・私費）、友情増進においては性別と経済状況によって相違が見られた；(3)情報伝達と友情増進、対人緊張において、留学生らの年齢以外に、ケータイの使用歴、携帯電話と携帯メールの使用頻度、入力熟練度による影響も認められた。この結果から、コミュニケーション・メディア観を検討する際には、使用者の個人的要因を視野に入れることが必要であると言える。

キーワード：留学生、質問紙調査、コミュニケーション・メディア観、相違、影響、要因

1. はじめに

ここ二十年間、ケータイ¹⁾に関する研究は様々な領域から行われてきている。そのうち、以下のような研究より、携帯電話と携帯メールは多くの面において異なる特性をもつことが明らかになった。例えば、友人に対する態度・友人との親密度によって友情を維持する方法（古谷・坂田 2006；岡本・江川 2003；岡本・高橋 2006）、情報伝達、親和感情と対人緊張の心理的特性（都築・木村 2000）、対人ネットワークの構造（北村ほか 2006；地引ほか 2006）などが挙げられている。しかし、これらはいずれも日本人大学生を対象にしたものであり、ほかの世代の日本人もしくは同世代の外国人留学生にも同様の結果が見られるかどうかはまだ検討されていない。

ところで、現在、日本人大学生だけでなく、留学生の95.6%もケータイを所持している（山本ほか 2005）。

日本学生支援機構（2010）の統計によると、2010年度5月の在日留学生数は141,774人であり、過去最高になった。また、文部科学省、外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省の6省庁が2008年7月末、2020年を目途に留学生30万人の受入れを目指す政策を打ち出した。これは現在の留学生を2倍ほど増やす壮大な計画であり、2008年度よりすでに実施されている。こうした状況から、留学生のメディア使用とともに、異なるコミュニケーション・メディアに対する認識や、それらに影響を及ぼす諸要因を明らかにすることも不可欠である。なぜなら、留学生のもつコミュニケーション・メディア観が、実際の行動を左右し、それが彼らの対人関係、とりわけ在日生活への適応にも影響を及ぼすと考えられるからである。例えば、CONNELLほか（2001）はCMC（電子メールとチャット）、電話と対面を取り上げ、人々のこれらに対する認識が彼らの集団・組織における対人関係にどう影響を及ぼすかを検討した結果、CMCと対面に比べて、電話による相互作用が最も自然で、満足度も最も高かった、と述べている。それはおそらく、電話が自然な振る舞い、満足のいく相互作用、及びメディアの豊かさ（richness）の間に、最適なブレンドを提供することができるからだと述べている。また、コミュニケーション・メディア観

2011年8月16日受理

[†] Shaoyu YE^{*1}: International Students' Perception of the Three Communication Media of Cell Phone Calls, Cell Phone Text Messages and E-mail via PC, and Factors Influencing on It

^{*1} Tokyo Institute of Technology, 2-12-1 Ookayama, Meguro-ku, Tokyo, 152-8550 Japan

の対人関係に及ぼす影響が文化によって異なることも指摘されている (ZHANG 2007)。

これまで留学生を対象に、携帯電話・携帯メールと PC といったメディアの使用状況と対人コミュニケーションを取り上げ、より全面的に検討したのは、管見の限りでは馬場・福田 (2010) である。馬場・福田 (2010) は留学生のメディア使用とコミュニケーションの実態を検討した結果、留学生のメディア使用が日本人大学生と異なっており、その相違は彼らの地域活動への参加、日本人 (学生) と友人になる数、在日生活における満足度などに影響を及ぼしたことが分かった。しかし、先行研究には以下のような課題が依然として残っている。

まず、留学生のケータイとりわけ携帯メールの使用は、年齢や言語 (日本語・英語) 能力、入力熟練度などといった個人的要因と大きく関わっていると思われる。それゆえ、留学生のメディア使用を検討する際に、このような要因も考慮すべきだと考えられる。

また、馬場・福田 (2010) では、インターネットの使用はケータイと PC の両方を含めての検討が行われた。しかし、2つのメディアは使用の利便性やユビキタス性が異なるため、インターネットの使用を検討するには、ケータイと PC に分けて行うべきだと言えよう。

さらに、馬場・福田 (2010) は、留学生のメディア使用がコミュニケーションの実態に影響を及ぼしたことは明らかにしたが、コミュニケーション・メディア観との関係はまだ検討していない。即ち、留学生のメディア使用がコミュニケーション・メディア観に影響を及ぼし、そのうえ行動に影響を及ぼすのか、それともコミュニケーション・メディア観の違いに由来して、行動に影響を及ぼすのかはまだ解明されていない、ということである。そして、各メディアに対する認識に相違があるかどうか。あるとしたらそれに影響を及ぼす要因は何なのか、についても検討されていない。

そこで、本研究では上記の問題を踏まえて、留学生のメディア使用と、彼らの個人的要因に関する項目を作成し、それが彼らのコミュニケーション・メディア観と如何に関係しているかを調査する。なお、これまで、留学生を対象にするコミュニケーション・メディア観の尺度が存在していない。そのため、本研究は、日本人大学生の携帯電話・携帯メール・PC メールに対する評価得点が3つの因子 (目的性、情緒性、対人圧力) においてそれぞれ異なつたという先行研究を基

礎として (都築・木村 2000)、尺度を作成した。

本研究の調査結果により、今後、大学側やアルバイト先が留学生らに緊急連絡のみならず、日常生活における情報提供や、事項確認などをする際に、効果的なメディア使用や円滑な対人関係の構築に参考になると考えられる。

2. 方 法

2.1. 調査回答者

埼玉大学に在籍する留学生518名 (休学者を除き) を調査対象とした。最終的に回収したのは444名であったが (回収率85.7%)、実際の分析では、ケータイを所持していない1名、ケータイは所持しているがメール機能を使用しない2名、滞日歴が3か月未満で日本のケータイを使いこなせないと思われる者、回答に不備があった者を除いた397名分を使用した。

2.2. 調査項目

- (1) 個人情報 (性別、年齢、出身地、専攻、身分、滞日歴、日本語能力) を記入するほか、留学目的 (葛 1999) などについて「1 全くそう思わない」から「7 非常にそう思う」までの7件法で回答を求めた。
- (2) 来日後のケータイ (電話・メール・インターネット) 使用歴、使用頻度・目的・対象 (馬場・福田 2010)、携帯メールの入力 (語彙やスピード) が上手かどうか、などに回答してもらった。そして、これらの使用が「情報伝達」「友情増進」「交際範囲」²⁾「対人緊張」に及ぼす影響を、「1 全くそう思わない」から「7 非常にそう思う」までの7件法で回答を求めた (表1)³⁾。
- (3) これまでの PC 使用歴、インターネット・電子メールの使用頻度・目的・対象に評定してもらったほか (馬場・福田 2010)、電子メールの使用が「情報伝達」「友情増進」「交際範囲」「対人緊張」に及ぼす

表1 コミュニケーション・メディア観に関する質問項目

-
- ・あなたは、○○を使用することは、情報を伝達するには有効だと思いますか？
 - ・あなたは、○○を使用することは、友情を深めることができると思いますか？
 - ・あなたは、○○を使用することは、交際範囲を広げることができると思いますか？ (例えば、日本人学生やほかの留学生と友達になったりするとか)
 - ・あなたは、○○を使用する際、緊張したり、ストレスを感じたりすると思いますか？
-

影響を、「1 全くそう思わない」から「7 非常にそう思う」までの7件法で評定を求めた(表1)。

2.3. 手続き

本調査は留学生の日本語能力による影響を避けるため、調査票は日本語版で作成され、英語版と中国語版に翻訳された。翻訳の適切さはバックトランスレーションにより確かめられた。

そして、調査票の信頼性を確かめるため、本調査を行う前に、2011年5月に、東京大学とお茶の水女子大学に在籍する6名の大学院留学生(男女各3名)に予備調査の回答に協力してもらった。

①中国語を母語とする2名の院生には中国語版に記入してもらった。②小学校の時から来日し、日本語はほぼ母国語と同レベルの博士課程に在籍する留学生1名と、学部から日本語を専攻し、現在博士課程に在籍する韓国系留学生1名には日本語版に回答してもらった。③TOEFL-IBT90点を獲得した中国系留学生1名と、中学校から大学まで英語教育を受けたマレーシア系留学生には英語版に回答してもらった。彼らの意見とフィードバックに基づいて質問紙を改善・修正した。回答は(1)にある個人情報の記入以外はすべて選択式で行われ、「複数回答可」以外の項目は1つの回答で評定させた。

調査票の使用言語について、中国系留学生には中国語版、他の留学生らには日本語版もしくは英語版を配付した。なお、言語能力に応じて、配られた調査票が自分に合わなかった場合、使用したい言語の調査票を直接国際交流支援室まで取り換えるよう指示した。

本調査票は埼玉大学国際交流センター・国際交流支援室が行った在籍・安全確認の調査票とともに、2011年6月1日～6月中下旬の間に、質問紙による一斉調査(集合回収調査)を行った。

3. 結果

3.1. 調査対象者の属性

調査対象者の基本的な属性として、性別、年齢、出身国、大学での所属、滞日歴、日本語能力試験1級の合格者、経済状況を表2に示す。

表2の通り、分析対象になった留学生のうち、男女の割合は6対4で、平均年齢は26.9歳であった。出身国・地域は中国が最も多く、その次に韓国、マレーシア、バングラデシュなどであった。身分としては、1/3ほどは学部生であり、半数以上は大学院生で、ほかは交換留学生・研究生・科目等履修生など(その他)で

表2 調査対象者の諸属性

| | | |
|----------|-------------------------------|-------------------|
| 性別 | 男性236名(59.4%) | 女性161名(40.6%) |
| 平均年齢 | 26.9歳(SD=4.24, レンジ19.1~44.0歳) | |
| 出身国(前6位) | 中国 55.4% | 韓国 11.8% |
| | マレーシア 5.3% | バングラデシュ 5.0% |
| | ベトナム 4.3% | スリランカ 3.5% |
| 大学での所属 | 学部生 34.3% | 大学院生(修士・博士) 51.9% |
| | その他 13.8% | |
| 滞日歴 | 1年未満 | 34名 8.6% |
| | 1年以上2年以内 | 97名 24.4% |
| | 2年以上3年以内 | 104名 26.2% |
| | 3年以上4年以内 | 67名 16.9% |
| | 4年以上5年以内 | 35名 8.8% |
| | 5年以上6年以内 | 22名 5.5% |
| | 6年以上7年以内 | 14名 3.5% |
| | 7年以上 | 24名 6.0% |
| 日本語能力 | L1 & N1 | 166名 41.8% |
| 経済区分 | 国費 | 70名 17.6% |
| | 私費 | 327名 82.4% |

あった。滞日歴については、「1年以上2年以内」、「2年以上3年以内」と「3年以上4年以内」が全体の6割以上を占めていた。そのうち、学部生の平均滞日歴は41ヶ月で、大学院生は36ヶ月、その他は21ヶ月であった。日本語能力試験1級に合格していた者は166名であり、学部生、大学院生、その他の合格割合は、それぞれ55.2%、31.6%、43.3%であった。経済区分としては、8割以上が私費留学生であった。

3.2. 各コミュニケーション・メディアの使用状況

本節では留学生らの各コミュニケーション・メディアの使用状況について分析を行う。

まず、各メディアの使用歴は図1のとおり、PC(母国での使用も含む)は6割ほどが8年以上であったのに対して、ケータイの方は「1~2年」「2~3年」「3~4年」が半数以上を占めていることが分かった。

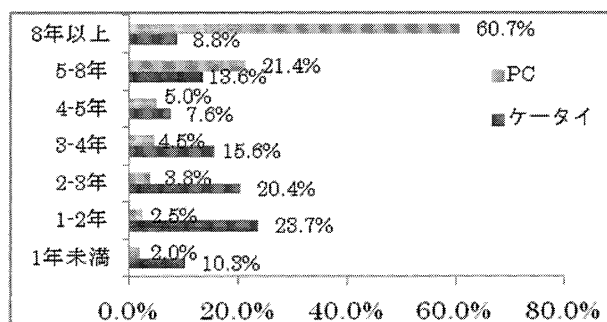


図1 PCと日本ケータイの使用歴

次に、各コミュニケーション・メディアの1日あたりの使用頻度を図2（携帯電話）と表3（携帯メールとPCの電子メール（以下「PCメール」））に示す。

図2から、留学生の携帯電話の使用頻度は、最も多かったのは「3～5回」で、次に「ほとんどしない」

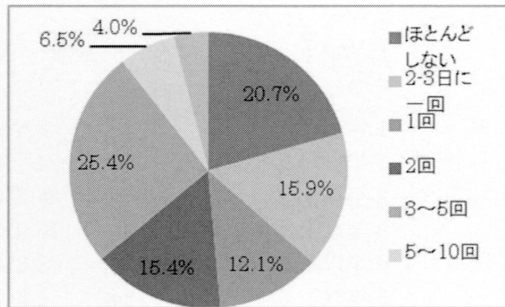


図2 携帯電話の使用頻度

表3 携帯メールとPCメールの使用頻度

| 一日の使用頻度 | 携帯メール | PCメール |
|---------|-------|-------|
| 5通以下 | 59.2% | 78.1% |
| 5～10通 | 24.2% | 17.4% |
| 10～20通 | 10.6% | 3.0% |
| 20～30通 | 4.0% | 0.5% |
| 30～40通 | 0.8% | 0.5% |
| 40～50通 | 0.5% | 0.5% |
| 50通以上 | 0.5% | 0.3% |
| 合計 | 100% | 100% |

表4 PCインターネットのアクセス時間

| 1時間以内 | 1～2時間 | 2～3時間 | 3～4時間 | 4～5時間 | 5～6時間 | 6時間以上 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 3.0% | 17.1% | 23.7% | 14.6% | 9.6% | 6.3% | 25.7% |

表5 ケータイによるインターネットのアクセス時間

| 全くしない | 0～20分 | 20～40分 | 40～60分 | 1～1時間20分 | 1時間20分～2時間 | 2時間以上 |
|-------|-------|--------|--------|----------|------------|-------|
| 46.9% | 19.1% | 11.1% | 7.6% | 2.3% | 4.5% | 8.3% |

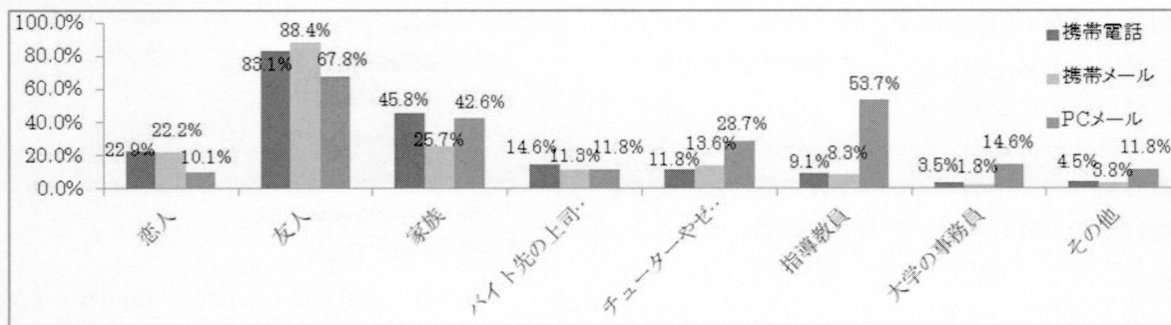


図3 携帯電話・携帯メール・PCメールの使用対象

「2～3日に1回」、「1日2回」などであった。そして、携帯メールとPCメールの使用頻度は、両方とも「5通以下」が最も多かったが、携帯メールは「5～10通」と「10～20通」も多く、いずれもPCメールを大きく上回っていることが分かった。また、携帯メールを入力する熟練度の平均得点は4.46 ($SD=1.46$)であった。これはメールの入力が「やや上手だ」と示す得点であり、携帯メールの使用頻度とも有意な相関があった ($r=.30, p<.001$)。なお、入力熟練度は年齢との相関が見られず、性別と経済状況による差異も認められなかった。

続いて、PCとケータイによるインターネットの使用頻度を表4と表5に示す。表4のとおり、PCについて、1/4以上は「6時間以上」、その次に1/4弱は「2～3時間」を利用していることが分かった。一方で、ケータイについては、「全く利用しない」と答えたのは半分弱であり、その次に1/5ほどは「0～20分」と答え、1時間以上とした人はごく少数であることが分かった。

さらに、携帯電話・携帯メール・PCメール（いずれも発信のみ）の使用対象は図3の通り、いずれも最もよく連絡する相手は「友人」であった。その次に、PCメールは「指導教員」と「家族」、携帯メールと携帯電話の両方ともに、「家族」と「恋人」に使用していることが分かった。

3.3. コミュニケーション・メディア観の相違

本節では、留学生らの3つのコミュニケーション・メディアに対する認識に相違があるかどうかを明らかにする。そのため、彼らの「情報伝達」「友情増進」「交際範囲」「対人緊張」における得点を t 検定(対応あり)で分析した。結果は以下の通りであった。

- (1) 情報伝達において、携帯電話・携帯メールと PC メールそれぞれの平均得点は5.59, 5.35と5.49であった。そして、メディア間の得点の差を検定変数として行ったところ、携帯電話と携帯メールの間、及び携帯メールと PC メールの間には、差が見られた。前者は $t(396)=3.23, p<.01$ で、後者は $t(396)=1.87, p<.1$ であった。
- (2) 友情増進において、携帯電話・携帯メールと PC メールそれぞれの平均得点は5.08, 5.00と4.68であった。そして、携帯電話と PC メールの間、及び携帯メールと PC メールの間には、それぞれ得点の差が有意であった。前者については、 $t(396)=4.16, p<.001$ であり、後者については、 $t(396)=3.81, p<.001$ であった。
- (3) 交際範囲において、携帯電話・携帯メールと PC メールそれぞれの平均得点は4.64, 4.72と4.58であった。いずれのメディア間においても、得点の差は有意ではなかった。
- (4) 対人緊張において、携帯電話・携帯メールと PC メールそれぞれの平均得点は3.06, 2.43と2.32であった。そして、携帯電話と携帯メールの間、及び携帯電話と PC メールの間における得点の差は有意であった。前者については、 $t(396)=7.35, p<.001$ であり、後者については、 $t(396)=8.45, p<.001$ であった。

また、これらの認識の差は男女によって異なるかどうかについて、以上(1)(2)(4)で分析したメディア間に有意差が見られた項目得点の差を検定変数として、独立したサンプルの t 検定で分析を行った。その結果、

男女によって有意差が見られたのは、友情増進における携帯メールと PC メールの間だけであった ($t(395)=2.16, p<.05, Ms=.17$ & $.53$)。男性に比べて、女性の方が2つのメディアに対する認識の差が大きかった。すなわち、男性は携帯メールと PC メールを同じように捉えているのに対して、女性は携帯メールの効果をより高く評価した、ということである。これは日本人大学生を対象とした結果と同様であった (e.g., 松田 2001)。

さらに、日本人大学生のケータイ使用に経済状況が影響を及ぼしたことが示されたため (e.g., 松田 2005)、留学生のメディア使用にも影響を及ぼすと考えられる。そこで、上記(1)(2)(4)の分析で相違が見られたメディア間の得点の差を検定変数として、国費・私費⁴⁾によって異なるかどうかに関する分析も行った。その結果を表6に示す。

この結果から、(1)情報伝達において、私費留学生に比べて、国費留学生の方が携帯メールと PC メールに対する認識の差が大きかった；(2)友情増進において、携帯電話と PC メールの間においても、携帯メールと PC メールの間においても、私費留学生はポジティブな評価をしたのに対して、国費留学生の方はネガティブな評価をしたことが分かった。これは、私費留学生は情報伝達と友情増進における携帯電話と携帯メールの効果を高く評価したのに対して、国費留学生の方は PC メールを高く評価したことを意味している。

3.4. コミュニケーション・メディア観の相違に影響を及ぼす要因

本節では留学生の諸属性(年齢、性別、経済状況、滞日歴、日本語能力⁵⁾)とともに、各コミュニケーション・メディアの使用が彼らの認識にどう影響を及ぼすかを分析する。なお、携帯メールの使用頻度は入力熟練度にも影響されると思われるので、「携帯メールの使用頻度」をモデルに投入する場合は「入力の熟練度」も投入する。また、PCメールの使用はインタ

表6 経済状況とコミュニケーション・メディア認識の差

| | 携帯電話と携帯メール | 携帯電話と PC メール | 携帯メールと PC メール |
|------|------------|---|--|
| 情報伝達 | — | — | $t(395)=3.5, p<.01$ $Ms=0.76$ & 0.01 |
| 友情増進 | — | $t(395)=2.89, p<.01$ $Ms=-0.21$ & 0.53 | $t(395)=4.92, p<.001$ $Ms=-0.56$ & 0.50 |
| 交際範囲 | — | — | — |
| 対人緊張 | — | — | — |

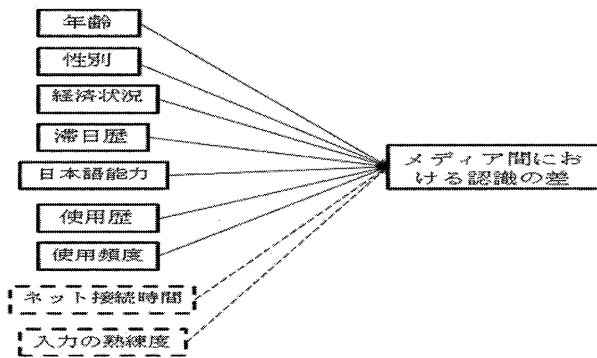


図4 重回帰分析をするモデル

一ネットに接続しなければならないため、「PCメールの使用頻度」をモデルに投入する際には、「PCインターネットの接続時間」も変数として投入する。本研究では図4のパスモデルを用いて分析を行う⁶⁾。なお、携帯メールの入力熟練度とPCインターネットの接続時間が全ての分析には必要ではないため、点線で示す。

その結果、以下のようなことが明らかになった。

- (1) 情報伝達における携帯電話と携帯メールに対する認識の相違について、携帯電話の使用頻度は正の影響、入力の熟練度は負の影響を及ぼしたことが分かった（それぞれ $\beta=.26, p<.001$; $\beta=-.16, p<.01$ ）。回帰式全体の決定係数は $R^2=.10, p<.001$ であった。これは、携帯メールの入力があまり上手ではなく、かつ携帯電話をよく利用する人が、より携帯電話の効果を高く評価したことを意味している。
- (2) 情報伝達における携帯メールとPCメールに対する認識の相違について、留学生の年齢は正の影響、入力の熟練度は負の影響を及ぼしたことが分かった（それぞれ $\beta=.18, p<.01$; $\beta=-.18, p<.001$ ）。回帰式全体の決定係数は $R^2=.15, p<.001$ であった。この結果から、年齢とともに、かつ携帯メールの入力があまり上手ではない人が、よりPCメールの効果を評価したことが読み取れた。
- (3) 友情増進における携帯電話とPCメールの認識の相違について、年齢は負の影響、携帯電話の使用頻度は正の影響を及ぼしたことが見られた（それぞれ $\beta=-.22, p<.001$; $\beta=.24, p<.001$ ）。回帰式全体の決定係数は $R^2=.15, p<.001$ であった。この結果から、携帯電話の使用頻度が高く、かつ比較的若い留学生の方が、より携帯電話の効果を評価した、ということが言える。
- (4) 友情増進における携帯メールとPCメールに対する認識の相違について、経済状況と入力の熟練度は

正の影響、年齢とPCインターネットの接続時間は負の影響を及ぼしたことが分かった（それぞれ $\beta=.10, p<.05$; $\beta=.15, p<.01$; $\beta=-.25, p<.001$; $\beta=-.12, p<.05$ ）。回帰式全体の決定係数は $R^2=.21, p<.001$ であった。この結果は、比較的若い私費留学生の中、PCによるインターネットの接続時間が短く、かつ携帯メールの入力が上手な人が、より携帯メールの効果を高く評価した、ということを示している。

- (5) 対人緊張における携帯電話と携帯メールに対する認識の相違について、携帯メールの使用頻度と入力の熟練度による正の影響、携帯電話の使用頻度による負の影響が見られた（それぞれ $\beta=.12, p<.05$; $\beta=.13, p<.05$; $\beta=-.22, p<.001$ ）。回帰式全体の決定係数は $R^2=.10, p<.001$ であった。この結果から、ケータイの使用について、対人緊張であるかどうかは他の要因ではなく、携帯電話と携帯メールの使用頻度、及び入力の熟練度由来したことが示された。
- (6) 対人緊張における携帯電話とPCメールに対する認識の相違について、上記(3)の分析と同じ独立変数を投入した重回帰分析では、回帰式全体の有意水準は.05以上となり、そのまま適用できなかった。それゆえ、年齢・性別・経済状況・滞日歴・日本語能力・ケータイの使用歴を1つずつ取り除いた。その結果、携帯電話とPCメールの使用頻度、PCインターネットの接続時間、PCの使用歴を投入したところ、投入した回帰式全体の決定係数は $R^2=.30, p<.05$ になった。各独立変数の中、携帯電話の使用頻度が負の影響を及ぼしたことが分かった（ $\beta=-.14, p<.01$ ）。

4. 考 察

本研究の目的は、携帯電話・携帯メール・PCメールといったコミュニケーション・メディアの使用が対人関係・異文化交流に有効と推測される在日留學生を対象に、各コミュニケーション・メディアに対する認識の相違、及びそれに影響を及ぼす諸要因を明らかにすることであった。

4.1. コミュニケーション・メディア観の相違

在日留學生の携帯電話・携帯メール・PCメールに対する認識の相違は、情報伝達・友情増進・対人緊張といった面に存在したことが確認できた。これは日本人大學生を対象にした調査結果と類似している（e.g., 岡本・江川 2003 ; 都築・木村 2000）。

しかし、交際範囲においてのみ、いずれのメディア

間においても相違は見られなかった。これについて、以下の理由が考えられる。

第一に、留学生らは携帯電話・携帯メール・PC メールを、友人や知人・家族と連絡する手段として利用しているため(図3)、他者とのつながりを維持する道具だと考えている。一方、交際範囲を広げるには、同じ国・地域の出身者を除き、日本人学生や他国の留学生とコミュニケーションを図るため、コミュニケーション・メディアより、高度の日本語や英語能力が求められるのだろう。また、異なるキャリア間のケータイ使用は、電話はもちろん、メールの送受信さえも料金がかかる。語学能力や経済的状況に制限されるため、交際範囲を広げるのではなく、関係維持の道具として利用した方が効果的で、現実的であると言える。

第二に、表2に示したように、本研究の調査対象の半数以上が大学院生であったため、普段は勉学や研究に忙しい日々が多かったのだろう。それゆえ、ケータイやPCを使用して、積極的に交際範囲を広げることはあまりできなかったのではないかと考えられる。

なお、本研究でいう「交際範囲」とは、実際に日本人(教職員や学生)や、同じ出身地・国の留学生、それ以外の人々との関係が含まれるものである。例えば、図3に示したように、本研究が取り上げた3つのコミュニケーション・メディアの使用対象はいずれも「友人」が最も多かったが、それは同国・地域の留学生かどうかは本調査からは断定できなかった。今後、この部分に関してより詳細な調査項目を設定することで、調査としての信頼性・妥当性を向上させる必要がある。

4.2. コミュニケーション・メディア観の相違に影響を及ぼす要因について

本研究では、留学生のコミュニケーション・メディアに対する認識の相違は何に由来したのか、年齢・性別・経済状況のほかに、滞日歴・日本語能力とともに、各コミュニケーション・メディアの使用歴、使用頻度と熟練度を独立変数として分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 携帯電話と携帯メールに対する認識の相違は、情報伝達と対人緊張の両方において見られた。それは、携帯電話・携帯メールの使用頻度、及び入力熟練度に由来したことであった。
- (2) 携帯電話とPCメールに対する認識の相違は、友情増進と対人緊張の両方において見られた。この2つの相違に共通して影響を及ぼしたのは携帯電話の使用頻度であったが、友情増進においては年齢によ

る影響も認められた。

- (3) 携帯メールとPCメールの間に、認識の相違が見られたのは情報伝達と友情増進であった。この2つの認識差に共通して影響を及ぼしたのは年齢と携帯メールの入力熟練度であったが、友情増進の方は、経済状況とPCインターネットの接続時間にも影響された。

第一に、携帯電話と携帯メールに対する認識の相違について、これまで日本人大学生を対象にした結果は親密度や地理的距離に由来したとされている(古谷・坂田 2006; 岡本・高橋 2006)。しかし、本研究では、留学生の認識に影響を及ぼしたのはほかでもなく、単なる携帯電話・携帯メールの使用頻度と入力熟練度だったことが明らかになった。また、情報伝達においては、携帯電話の使用頻度は正の影響、携帯メールの入力熟練度は負の影響を及ぼしたのに対して、対人緊張においては、逆の影響パターンが見られた。これらは、携帯電話の使用頻度とメール入力の熟練度が変われば、留学生の情報伝達と対人緊張における認識も変わる可能性を示唆している。

第二に、携帯電話とPCメールに対する認識の相違に影響を及ぼした共通の要因は、携帯電話の使用頻度であった。また、友情増進において、留学生らの年齢も影響を及ぼしたことが確認された。本研究の結果から、若い留学生が携帯電話をよく利用し、それが友情を深めるには効果があると評価し、実際に電話で話すときもあまり緊張を感じなかったことが示された。一方で、年齢とともに、あまり携帯電話を使用しなかった留学生は、それを利用した際に、緊張やストレスを感じたりした。それゆえ、携帯電話に比べて、よりPCメールの効果を評価したのである。これについて、1つ考えられる大きな理由は留学生の言語能力である。3.1.で示されたように、大学院生に比べて、学部生の日本語能力試験合格率も高く、平均滞日歴も長かった。これは、日本語で受験し、かつ合格した学部生の方は高度の日本語能力を備えるのに対して、年齢が比較的上である大学院生の多くは日本語ができない実態の反映だと思われる。それに由来して、携帯電話とPCメールの使用頻度が異なったのである。大学院生(特に博士)にとって、母語以外に、相手が英語が話せなければ、コミュニケーション自体が成立できないと言える。それらによってコミュニケーション・メディア観に差が生じたのではないかと考えられる。

第三に、携帯メールとPCメールに対する認識の相

違は、情報伝達と友情増進の両方において見られた。情報伝達においては携帯メールより PC メールの方が評価が高かったことは先行研究と異なっている (e.g., 都築・木村 2000)。これはおそらく、以下のことに由来したと考えられる。まず、携帯メールに比べて、PC メールの方が日本語能力による制限がほとんどなく、入力や変換等の操作もケータイより簡単なため、比較的短時間で多くの情報を伝達することができる。また、前述したように、本研究の調査対象は半数以上が大学院生であるため、経済的に余裕があり、比較的 PC を自由に使用する時間も多かった。彼らには、日本語能力による制限もあり、それに関連して、携帯メールの入力が煩わしかったのだろう。その結果、携帯メールより、PC メールの方を多く利用し、PC が情報を伝えるには効果的だと考えているのだろう。

一方、友情増進においては、全体として PC メールより、携帯メールに対する評価が高かった。これは日本人大学生を対象にした結果と類似している。なお、先行研究では、この2つのコミュニケーション・メディアにおける認識の相違は親密度に由来したとされているが、本研究はほかの要素が原因だったことを3.4.に示した。私費留学生の中、経済的な理由でアルバイトなどをすることが多く、必然的に他者と接触することになっているのだろう。彼らは比較的年齢が若く⁷⁾、携帯メールの入力が熟練しており、PC インターネットの接続時間も短かった。彼らには、外出先でも友人と連絡が取れ、常につながりを確認することができるだけでなく、自分の都合に合わせて使える携帯メールには、その利便性を感じたのではないかと考えられる。

5. まとめと今後の検討課題

本研究は、在日留学生のコミュニケーション・メディア観について、携帯電話・携帯メール・PCメールの相違を明らかにするとともに、各メディアの使用歴・使用頻度・熟練度、及び留学生の年齢・性別・経済状況・滞日歴・日本語能力といった個人的要因がいかに影響を及ぼすかを検討したものである。結果は、①情報伝達をするには、携帯電話＝PCメール>携帯メール；②友情増進をするには、携帯電話＝携帯メール>PCメール；③緊張したり、ストレスを感じたりする面においては、携帯電話>携帯メール＝PCメール、といった認識であった。また、これらの認識の差に影響を及ぼした要因はそれぞれ異なっており、先行研究のように、友人との親密度や地理的距離といった次元には

帰着できないことを示唆した。

なお、3.4.で見られたように、重回帰分析の結果において、いずれも決定係数がそれほど高くなかった。それは、本研究が取り上げた変数以外、ほかに影響を及ぼす変数が存在するかもしれないことを示唆している。今後、検討すべき課題と考えられる。

そして、本研究の調査は、留学生らの所持するケータイの台数、月々の使用料金、及び出身国のケータイ使用に関しては取り上げていない。これらも含め、彼らのコミュニケーション・メディア観が実際の対人コミュニケーションにどう影響を及ぼすかについては、詳細な検討が必要であろう。

さらに、本研究では、携帯電話・携帯メール・PCメールを取り上げたが、対面との相違はまだ検討していない。それゆえ、今回の調査結果より、留学生の日本のケータイ使用歴、携帯電話と携帯メールの使用頻度、PC インターネットの接続時間がコミュニケーション・メディア観の相違に影響を及ぼしたことが確認されたが、対面でコミュニケーションをする際に、どのような要因が影響を及ぼすかという点はまだ不明である。それを検討することも今後の課題である。

註

- 1) 本研究では、先行研究に従い、通話機能のみの場合は「携帯電話」、メール機能のみの場合は「携帯メール」に分けて表記する。また、電話とメールを区別せず、機器そのものを指す場合は「ケータイ」と表す。
- 2) 先行研究では、日本人学生を対象にした調査結果が「情報伝達」「親和感情」「対人緊張」と分類された。本研究では、留学生が友人のみならず、在日生活において、メディアを利用して自分の交際範囲を広げるには有効かどうかを究明するため、「親和感情」の代わりに、「友情を増進するかどうか」（「友情増進」と略す）と「交際範囲を広げるかどうか」（「交際範囲」と略す）に分けて調査項目を作成した。
- 3) 「〇〇」とは、それぞれ「携帯電話」、「携帯メール」、「PCの電子メール」を指す。
- 4) 埼玉大学には、通念の「国費」（文部科学省）と「私費」以外に、「政府派遣」と「日韓共同理工系学部留学生」（以下「日韓韓」と「日韓日」と略す）の身分で来日する留学生もいる。「政府派遣」と「日韓韓」は私費扱いで、「日韓日」は国費扱いとされ

ている。そのため、本研究でいう「国費」とは「文部科学省奨学金」と「日韓日」, 「私費」とは「個人」, 「政府派遣」と「日韓韓」を指す。

- 5) 調査票には、留学生らに日本語能力を客観的尺度（日本語能力試験1・2級）と自己評価（「聞く・話す・読む・書く」の各レベルにおけるパーセンテージ）を記入してもらった。分析をする際には、日本語能力試験1級・2級に合格していた人はその点数を用いたが、受験していない人は自己評価における得点の合計を用いた。なお、日本語能力試験は新旧の評価・得点基準が異なるため、そのまま点数を用いることはできなかった。それゆえ、分析に当たっては、以下の通りで計算する：日本語能力試験L1を受験する人は「実際の点数/400」とし（L2の場合は「実際の点数/400×0.8」、2級レベルは1級レベルの8割に相当するため）、N1を受験した人は「実際の点数/180」（N2の場合は「実際の点数/180×0.8」）とした。
- 6) 性別と経済状況は名義尺度であるため、重回帰分析を行った際、それぞれダミー変数（性別：男性を1, 女性を2, 経済状況：国費を1, 私費を2）としてモデルに投入した。
- 7) 私費留学生の平均年齢は26.4歳で、国費留学生の平均年齢は29.5歳であった。

謝 辞

本研究のアンケート調査を実施するにあたって、埼玉大学国際交流支援室の高尾敏史室長をはじめ、多くの方々にご協力いただきまして、謹んでお礼を申し上げます。また、調査票及び予備調査にご回答いただいた留学生の皆様にも感謝致します。

参 考 文 献

- 馬場眞知子, 福田豊 (2010) 外国人留学生の ICT 利用とコミュニケーション. 情報社会学会誌, 4(2): 15-30
- CONNELL, J.B., MENDELSON, G.A. and CANNY, J. (2011) Effects of communication medium on interpersonal perceptions: Don't hang Up on the telephone Yet! *GROUP '01 Proceeding of the 2001 International ACM SIGGROUP Conference on Supporting Group Work*: 117-126
- 古谷嘉一郎, 坂田桐子 (2006) 対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して. 社会心理学研究, 22(1): 72-84
- 葛文綺 (1999) 留学生の異文化適応に関する研究—来日目的、滞日イメージと適応度との関連を中心に—. 名古屋大学教育学部紀要, 46: 287-297
- 地引泰人, 北村智, 秋山大志, 堀田龍也 (2006) 携帯電話の通話および携帯メールの社会ネットワークの比較分析(2): ネットワークの構成員(個人)に着目した分析. 2006年日本社会情報学会(JSIS&JASI) 合同大会研究発表論文集: 95-96
- 北村智, 地引泰人, 秋山大志, 堀田龍也 (2006) 携帯電話の通話および携帯メールの社会ネットワークの比較分析(1): ネットワーク構造の特徴に関する分析. 2006年日本社会情報学会(JSIS&JASI) 合同大会研究発表論文集: 93-94
- 松田美佐 (2001) 大学生の携帯電話・電子メール利用状況. 情報研究, 26: 167-179
- 松田幸弘 (2005) 携帯電話と携帯メールの利用に影響する諸要因の分析. 大阪経大論集, 56(2): 97-107
- 日本学生支援機構 (2010) 平成22年度外国人留学生在籍状況調査結果.
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data10.pdf (参照日 2011.08.04)
- 岡本香, 江川朋幸 (2003) 携帯メディアコミュニケーションと大学生の友人関係態度との関連. 日本教育工学雑誌, 27(Suppl): 137-240
- 岡本香, 高橋超 (2006) 親密度の違いおよびコミュニケーション形態の違いがメディア・コミュニケーション観に及ぼす影響. 実験社会心理学研究, 45(2): 85-97
- 都築誉史, 木村泰之 (2000) 大学生におけるメディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析—対面、携帯電話、携帯メール、電子メール条件の比較—. 応用社会学研究, 42: 15-24
- 山本健治, 水田直美, 土井佳彦 (2005) 携帯メールを利用した留学生に対する日本語指導の実践報告—日本語能力試験1~2級合格者に対する表現力指導の効果について. 倉敷芸術科学大学紀要, 10: 211-220
- ZHANG, Q. (2007) Effect of culture, medium, and task on trust perception.
<http://www.cs.cmu.edu/~sfussell/CHI2007/ZhangAbstract.pdf> (accessed 2012.01.22)

Summary

The present study investigated how international students perceive the three communication media of cell phone calls, cell phone text messages and e-mail via PC, and what kind of factor (s) influence on their perception. A questionnaire was conducted on 518 international students enrolled at Saitama University. As a result, it was clarified that (i) they perceived differently among the three communication media in terms of information transmission, friendship promotion and interpersonal tension; (ii) their perception differed in information transmission due to their economic situations, while different perception in friendship promotion were resulted

from their genders and economic situations; (iii) in terms of the information transmission, friendship promotion and interpersonal tension, in addition of their ages, their history of using Japan's cell phones, frequency of using cell phone calls and cell phone text messages, and skill in typing cell phone text messages influenced on their perception. The present results suggest the necessity of considering users' personal factors when examining any perception of communication media.

KEY WORDS: INTERNATIONAL STUDENTS, QUESTIONNAIRES, PERCEPTION OF COMMUNICATION MEDIA, DIFFERENCES, INFLUENCE, FACTORS

(Received August 16, 2011)